

都市における移住者と文化

——一九世紀パリにおける地方出身者の事例——

長 井 伸 仁

〔要約〕パリは一九世紀に入ると百年で五倍超という急激な人口増を経験するが、増加の大半は地方からの人口流入によるものだった。人口流入はそれ自体で多くの問題を生み出すが、他方で、フランスは一九世紀を通じて言語的・文化的な多様性を色濃く残しており、それはパリにも反映されていたと考えられる。だが、移住者たちが言語的・文化的特性をどれほど有していたのか、その結果パリがいかなる都市社会であったのかを総体的に測ることは、容易ではない。本稿では、この問題に対してカトリック教会の認識や活動を通じて追った。研究の結果、パリ大司教座は地方出身者の処遇や特性に注意を払っていなかったこと、また、地方出身者を対象としたカトリック系の団体は、困窮者の扶助を活動の中心にしていたことが判明した。これについては、地方からの移住者には目立った特性がなかったか、あるいは、彼らの特性がさして意識されなかったかの、二通りの解釈が可能であると考えられる。

史林 九五巻一号 二〇二二年一月

第一章 問題の所在

現在の世界では、都市は民族性（エスニシティ、ナショナルイティ）と本質的に関連する場であるといえる。民族性は都市を場として発現することが多いし、都市問題とよばれるものはしばしば民族性にかかわる問題だからである。

このことは歴史研究にも反映される。都市史研究にとって、異なる出自や特性を持つ集団が都市においていかに共存し

てきたのかをみることは、重要な主題を構成する。この点を、近代フランス都市の状況とそれをめぐる研究の動向に即して、確認しておきたい。

都市の都市たるゆえんは人口の集積にあるため、都市史研究にとって人口動態はつねに中心的なテーマをなしてきた。フランスでは、近現代の都市史研究がイギリスなどに比べ立ち後れ気味であったが、そのようななかでも都市人口については、フランスの学界が歴史人口学を切り開いてきたこともあって、はやくから注目されていた^①。その主たる対象のひとつが、首都パリである。

パリは、一六世紀前半にはすでに二〇万を超える人口を擁し、近世ヨーロッパ屈指の規模の都市であったが、一九世紀に入ると急激な膨張を経験した。一八〇一年に五四・六万だった人口は、百年後の一九〇一年にはじつに二七一万に達する。いわゆるパリ改造にともない一八六一年に市域が三四平方キロメートルから七八平方キロメートルへと拡大したが、以後の四〇年だけでも増加分は一〇〇万人を超えている。

一九世紀パリの人口増とその影響については、ルイ・シュヴァリエの古典的研究がいまも基礎文献である。ここでは、急激な膨張が都市問題や社会問題を引き起こしたさまが詳細に述べられている。とりわけ、パリ改造により都市基盤がある程度整備されるまでは、問題は深刻であった。一八四〇年前後を中心に、多くの医師や公衆衛生の専門家が、貧困、不衛生、飲酒、犯罪など工業化や都市化と軌を一にして生まれる諸問題に強い関心を寄せ、詳細な観察記録を作成、公表した。彼ら「社会観察者」は、身体および環境上の清潔・不清潔さと、道徳的な意味での健全・不健全さとを結びつけて考へる傾向があった。民衆層に属する人びとは、ともすれば「危険な階級」とみなされたのである。

ところで、人口増が都市問題や社会問題を引き起こしたことはたしかであるが、当時のフランス社会の構成を考慮すれば、別の問題が生み出されていた可能性を検討しておく必要がある。それは、冒頭で述べたような、異なる出自や特性を持つ集団の共生にかかわるものでもある。以下に、この点を説明しておく。

一九世紀のパリが経験した人口増は、その大半が域外からの人口流入によるものだった。一八二一—一八九〇年の人口増の内訳は、自然増すなわち出生によるものが一五パーセント、社会増すなわち人口流入によるものが六四パーセント、市域拡大によるものが二一パーセントであった。^③一九世紀後半のロンドンでは、自然増が八四パーセントと圧倒的な割合を占めていたから、パリでは人口流入がいかに顕著だったかがうかがえる。

パリへの移住者には外国人もいたが、大部分を占めていたのは地方から上京してきた人びとであった。パリの住民のうち、セーヌ県（パリを含む県）を除く諸県出身者——本稿では、同時代の呼称でもあった「地方出身者 *provinciaux*」という語を用いる——は、一八三三年時点で四一パーセント、一八九六年には五〇パーセントを超えていた。^④

一九世紀のフランスにあって、地方出身者のこのような多さは、たんに中央の対称としての地方、あるいは都市部の反対としての農村部が、パリ社会に多く代表されていたということにとどまらない。

周知の通り、フランスの言語的な多様性は、ほぼ一九世紀を通じてきわめて強いものであった。この点で数少ない公式調査のひとつ、一八六三年に公教育相デュリュイがおこなわせた言語調査によれば、南仏の多くの県では、人口の大半がフランス語を話さず、アリエージュ県ではその割合が九一パーセント、アヴェロン、ジェルス、ヴァールの各県では一〇〇パーセントに達したという。^⑤これらの県では、プロヴァンス語やラングドック語など、総じてオック語とよばれる言語が日常語であった。オック語は、いわゆるフランス語が属するオイル語と同じく、西ロマンズ語群に区分されるものの、オイル語ひいてはフランス語とは異なる言語である。^⑥

そのオック語圏では、一九世紀半ば、タルン県の視学官の報告に「判事にとつては証言を集めるにも尋問をするにも、悲しいことに方言が必要だ。また、神父様方も、方言で説教することにあまりに寛容に思える。（県都アルビの）壮麗なサント・セシル司教座聖堂でとりおこなわれるミサでさえ、方言の場合がある」と記されている。^⑦

いっぽうブルターニュ地方のフィニステール県では、ケルト系のブルトン語が日常語であり、二〇世紀初頭でも、すな

わち初等教育を義務化したフェリー法制定から二〇年を経ても、成年の半数以上がフランス語の基本的な表現さえわからず、子どもの多くは小学校入学時点でフランス語をいっさい知らなかったといわれる【図一参照】^⑧。

フランスがほぼ一九世紀を通じてこのような状況にあったとすれば、人口増加分のほとんどを地方から供給されていたパリが、均質な都市社会だったとは考えにくい。あるいは、パリがかりに「増埒」として、人びとの文化的な差異をだいに消していったにしても、それがどのように進化したのかという疑問も生じる。

実のところ、このような問題は、これまでの歴史研究において十分に注目されてきたとは言いがたい。

そもそもフランスの歴史学界では、都市における移住者の研究は多いとはいえない。たとえば、一九九八年に刊行されたバクーシユ編『フランス都市史（中世―二〇世紀）——文献一覧、一九六五―一九九六——』は、計三一六七の文献を挙げているが、近世末期以降のフランス都市における移住者を扱った研究は、多く見積もっても七〇に満たない^⑨。このことについて、一九世紀パリ史研究を牽引するフォールは、次のように述べる。「多くの地方出身者や外国人が、食習慣、信仰、ふるまいなど生まれ持った文化の一部を保ちつづけていたことは明らかである。しかし、この点にかんするわれわれの知識はまだ少ないのが実状である。パリにおける地域言語、すなわち『方言』の使用についてはほとんど何もわかっていない。』^⑩

実際には、地方出身者のコミュニティのモノグラフは、いくつが存在する。一九七〇年代には、「地方文化」を称揚する時代の風潮もあって、フランスでは地方出身者の共同体や共同性に関心が寄せられ、パリへの移住者の歴史についても比較的さかんに研究がなされた^⑪。だが、フォールも述べるとおり、それらの研究では言語の使用はほとんど対象になっていない^⑫。しかも、基本的には個別事例の研究であり、論証の過程や結論のニュアンスはさまざまにしても、結局は移住者の個性を強調して終わりがちである。特定の集団を取りあげ、それについて内在的に理解を深めていけば、おのずと特殊性が強調されるが、それを全体のなかでいかに位置づけるかという問題は解決しない。個別事例の集積を具体的な歴史像

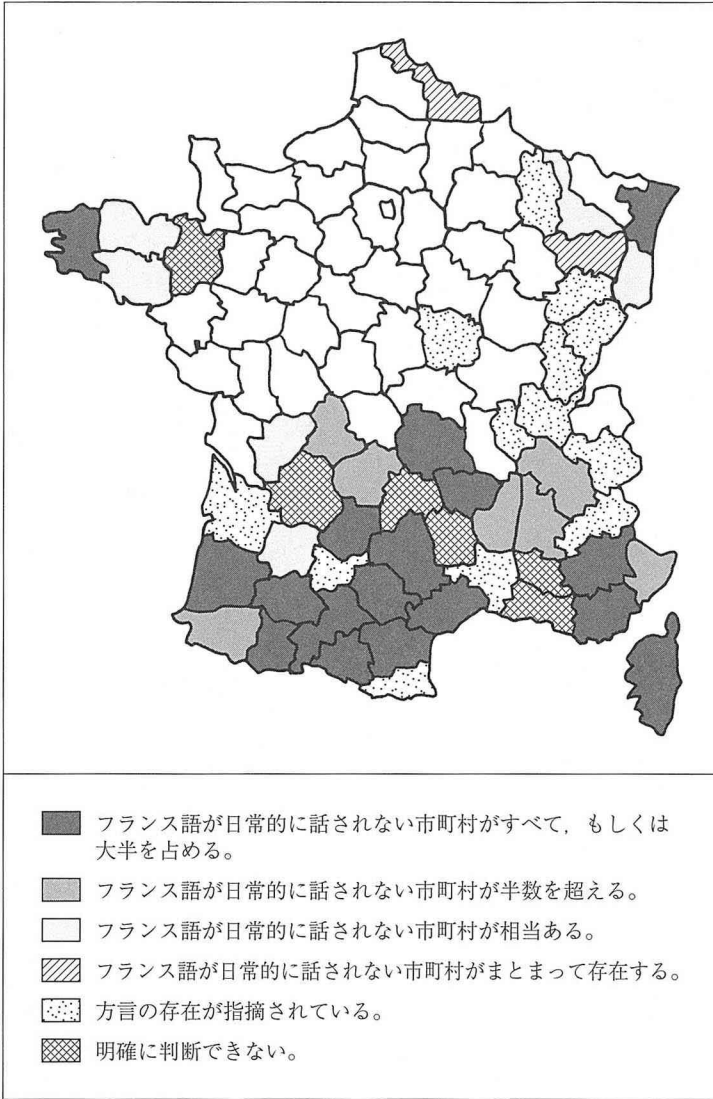


図1 フランス語以外の言語が日常的に用いられている県（1863年）
 出典：谷川稔・渡辺和行編『近代フランスの歴史』ミネルヴァ書房、2006年、157頁。

に結びつける作業が必要であるが、そこには未だ至っていないのである。

本稿は、そのような総体的把握のひとつの試みとして、カトリック教会に注目し、その認識と活動を調査するものである。教会に注目するのは、それが近代フランス史においては言語的・文化的多様性の擁護者という側面を持っているからである。

近代フランス史を貫くさまざまな対立軸のひとつに、カトリシズムと共和主義のそれがあることは、谷川稔の著作によって、いまや歴史像として定着している。革命は普遍性を志向し、そのなかでフランス語を「理性の言語」として広めようとしたが、そのフランス語は、「ヴォルテールの言語」ともよばれたように、カトリック教会にとつては革命と結びついた存在であった。地域や教区による差異はあるし、司教と教区司祭とで対応は異なるにしても、カトリック教会は、一九世紀半ば、民衆の宗教性を取り込もうとするようになったこともあり、地域語や地域文化の側に立つようになった。したがって、カトリック教会の認識や活動は、地方出身者の特性を検知する視点になりうる。さらに、教会が移住者の「受け皿」としていかに機能し、彼らの都市社会への統合をいかに助けたのかを検討することも、都市史研究にとつて大きな意味を持つといえる。

だが、このような問題意識および視点からの研究は少ない。都市史研究は、近代については宗教や教会を主たる対象とすることがまれてあった^⑮。いっぽう、宗教史研究の側では、近代都市への関心は伝統的に強いとはいえないものの、近年では、第二帝政期のパリ司教区について包括的な研究をおこなったブドンの著作のほか、都市と宗教の関係を問う論集がいくつか刊行されており、移住や移住者をめぐる教会の姿勢や活動に光が当てられるようになってきている。もともと、これまでの研究は多くの場合、特定のコミュニティや団体についてのモノグラフという形をとり、しかも言語の問題を正面から取りあげることが少ない。

以下の本稿では、関連する研究の成果のほか、同時代の証言、パリ大司教座文書館所蔵の文書などをもとにして、でき

る限りパリ全体を視野に収めつつ論を進めたい。その際、とくに注目するのが、地方出身者など移住者に対する援助や、彼らの交流を目的とした諸団体である。本稿ではそれを総じて「同郷会」とよぶ。構成としては、つづく第二章でパリへの移住者について概観したのち、第三章で同郷会の全体像を提示し、第四章で、同郷会のうちカトリック教会が関係していた団体の事例を検討する。

- ① ロマンヌにおける都市史研究の動向について、Rodger (Richard), eds. *European Urban History. Prospect and Retrospect*. Leicester / London, Leicester University Press, 1993. 近現代のロマンヌ、Baudouin (Remi), Faure (Alain), Foutcaut (Annie), Morel (Martine), Voldman (Danièle), «Écrire une histoire contemporaine de l'urbain», *Vingtième siècle. Revue d'histoire*, no. 27, 1990, pp. 97-105 ; Pinol (Jean-Luc), «L'histoire urbaine contemporaine en France», in Biget (Jean-Louis) / Hervé (Jean-Claude), éd. *Panorama urbain: Situation de l'histoire des villes*, Fontenay-aux-Roses / Saint-Cloud, ENS Editions, 1995, pp. 209-232 ; Foutcaut (Annie), «L'histoire urbaine de la France contemporaine : Etat des lieux», *Histoire urbaine*, no. 8, 2003, pp. 171-185 (中野隆生、前田更子訳「ロマンヌ二〇世紀前半の都市史——その成果と課題——」中野隆生編『都市空間の社会史——日本とロマンヌ——』山川出版社、二〇〇四年、二二〇—二二三頁)。
- ② Chevalier (Louis), *La Formation de la population parisienne au XIX^e siècle*, Paris, PUF, 1950 ; id. *Classes laborieuses et classes dangereuses à Paris pendant la première moitié du XIX^e siècle*, Paris, Pion, 1958, rééd. 1984 (喜安朗、木下賢一、相良匡俊訳『労働階級への危険な階級——一九世紀前半のパリ——』みすず書房、一九九三年) はかゝ近代パリについての近年の研究について、Laroulandie (Fabrice), *Les Ouvriers de Paris au XIX^e siècle*, Paris, Editions Christian, 1997 ; Ratcliffe (Barrie M.) / Pierte (Christine), *Vivre la ville. Les classes populaires à Paris (1^{ère} moitié du XIX^e siècle)*, Paris, Boutique de l'histoire, 2007. 拙稿「貧乏のなかで生きるロマンヌ——近代ロマンヌ都市住民の日常性と共同性——」『歴史学研究』八八六号、二〇一一年、五三—六三頁を参照された。
- ③ Pinol (Jean-Luc), dir. *Histoire de l'Europe urbaine*, 2 vols., Paris, Seuil, 2003, tome II, p. 77.
- ④ Chevalier, *La Formation*, op. cit., pp. 45-46. なお、外国人の割合は一八三三年時点で四パーセント、一八九六年では六・一パーセントであった。ただし、この一八九六年の数値にアルサス・ロレーヌ出身者は含まれていない。
- ⑤ Vugier (Philippe), «Diffusion d'une langue nationale et résistance des patois, en France, au XIX^e siècle. Quelques réflexions sur l'état présent de la recherche historique à ce propos», *Romantisme*, vol. 25, no. 6, 1979, pp. 191-208, p. 203.
- ⑥ ネット語について、佐野直子「ヨーロッパの多言語主義と少数言語——「ネット語」の事例から——」『フジテレビ社会』第九号、二〇〇五年、七五—一〇六頁。伊藤大吾「ロマンヌ語概論」大学書林、二〇〇七年。
- ⑦ Armengaud (André), «Enseignement et langues régionales au

XIX^e siècle. L'exemple du Sud-Ouest toulousain», in Gras (Christian) / Livet (Georges), dir., *Régions et régionalisme en France du XVIII^e siècle à nos jours*, Paris, PUF, 1977, pp. 265-272, p. 269.

② Ford (Caroline), *Creating the Nation in Provincial France. Religion and Political Identity in Brittany*, Princeton, Princeton University Press, 1993, p. 59ff.

③ Backouche (Isabelle), *L'Histoire urbaine en France (Moyen Age - XX^e siècle). Guide bibliographique, 1965-1996*, Paris, L'Harmattan, 1998.

④ アラン・フォール（拙訳）「彼らはいかにして「パリ人」となったか——一九世紀末パリ移住民の統合をめぐること——」『西洋史学』一九五号、一九九九年、四一—五九頁、五五頁。

⑤ 代表的なものの一例、Raison-Jourde (Françoise), *La Colonie anversanaise de Paris au XIX^e siècle*, Paris, Ville de Paris, 1976 ; *Ethnologie française*, vol. 10, no. 2, 1980, numéro spécial «Provinciaux et provinces à Paris» ; *Limousins de Paris. Les sociétés d'originaires du Limousin sous la Troisième République*, Limoges, PULIM, s. d. c. 1990).

⑥ オヴェルニュ地方出身者について詳細な著書を残したレンヌ・ミュルドも、カンタル県出身の水運び人はフランス語を学ぶだけで数ヶ月

を費やしたという、その頃やばいほどを察せずに語っている。

⑦ Raison-Jourde, *op. cit.*, p. 13.
⑧ 谷川登「十字架と三曲旗——その頃の近世フランス——」山川出版社、一九九七年。

⑨ Cholvy (Gérard), «Régionalisme et clergé catholique au XIX^e siècle», in Gras / Livet, dir., *op. cit.*, pp. 187-201 ; Launay (Marcel), *Le Bon prêtre. Le clergé rural au XIX^e siècle*, Paris, Aubier, 1986. *
⑩ Lagrée (Michel), dir., *Les Parlers de la foi. Religion et langues régionales*, Rennes, PUR, 1995.

⑪ 先に著したスタン・トドマンの文庫目録でも、宗教は独立した項目ではなく「日常生活」とひとまとめにされている。また、革命期以降の都市と宗教にかかわる研究は、多く見積らなくてはならない。○前後にかまこ。

⑫ Boudon (Jacques-Olivier), *Paris, capitale religieuse sous le Second Empire*, Paris, Cerf, 2001 ; Boutry (Philippe) / Encrevé (André), dir., *La Religion dans la ville*, Bordeaux, Editions Bière, 2003 ; Boudon (Jacques-Olivier) / Thelamon (Françoise), dir., *Les Chrétiens dans la ville*, Mont-Saint-Aignan, Publications des universités de Rouen et du Havre, 2006 ; Dumons (Bruno) / HOURS (Bernard), dir., *Ville et religion en Europe du XV^e au XX^e siècle. La cité renaissante*, Grenoble, Presses universitaires de Grenoble, 2010.

第二章 パリへの移住者

本章では、一九世紀のパリにおける移住者について、その数、出自、市内での居住状況などを確認する。

(一) 移住者の割合と内訳

パリへの移住者を研究する際、一九世紀前半と後半とでは史料の状況が大きく異なる。当時のフランスでは、住民票に相当する公的記録がないため、人口移動については民事籍簿 *registres de l'état civil*、選挙の有権者名簿 *listes electorales*、国勢調査 *recensements* を史料として用いることになる。民事籍簿は、個人の出生、婚姻、死亡を記録するが、その三つが別の台帳に記載されているため、同一人物について三つの関連を調べてライフサイクルを再構成することは、容易ではない。有権者名簿は、生年月日・出生地などのほか転出入なども記録している点で貴重であるが、男性普通選挙が導入される一八四八年以前のものは、人口移動の史料としては利用できない。国勢調査は、フランスでは一八〇一年からほぼ五年ごとに実施されているが、県外出身者の統計が公表されるのは一八六一年以降のことではない^①。しかも、本稿が対象とするパリについては、一八七一年のパリ・コミュニティンの火災によって民事籍簿の多くが焼失していることもあって、世紀前半の史料は極端に少ないのが実状である。

そのようななかで、統計学者ベルチヨンがおこなった推計は、一九世紀前半の移住者について貴重な情報を提供している。彼は、一八三三年にパリで死亡した二四、八四二名について調査をおこない、このうちパリ生まれが一、二、三一八名（四九六パーセント）、郊外生まれが六一二名（二五パーセント、ここでいう郊外はパリ市をのぞくセーヌ県、それ以外のフランス諸県が一〇、二二六名（四一・二パーセント）と算出した。出身県の分布をみると、フランスの北部および東部が相対的に多く、ほか、中央山塊のリムーザン地方およびオヴェルニュ地方の一部が目立つ。^②【図2】

世紀後半について、一八九一年の国勢調査の事例をみると、人口二、四二四、七〇五名中、パリ生まれが八八三、〇六〇名（三六・四パーセント）、郊外生まれが六三、〇〇七名（二・六パーセント）、地方諸県生まれが一、二二九、四六七名（五〇・三パーセント）となっており、パリ生まれと地方生まれの比率が逆転していることがわかる。出身県はあいかわらず北

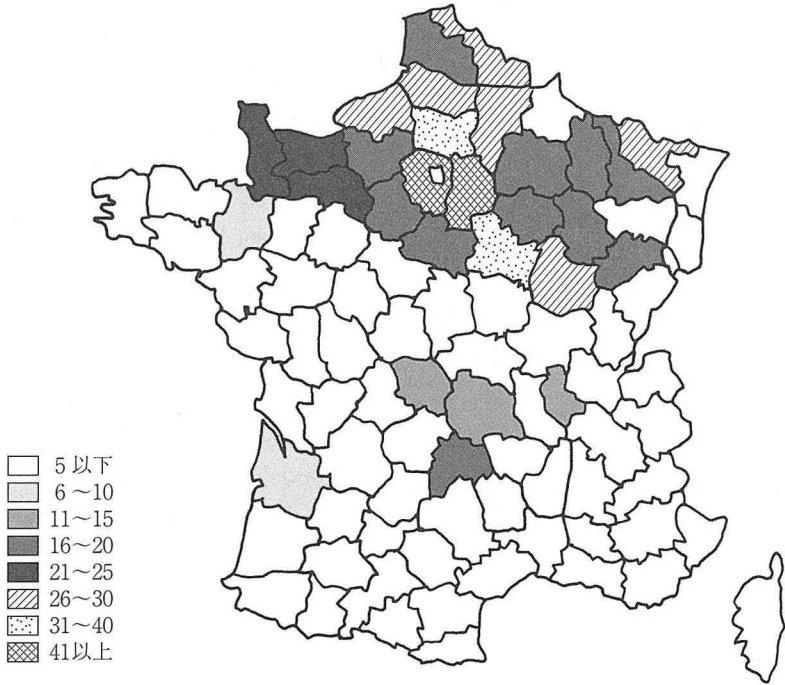


図2 パリの住民の出身県（1833年）

注：数値はパリ住民1,000人あたりの出身者。

出典：Vigier (Philippe), *Paris pendant la Monarchie de Juillet*, Paris, Hachette, 1991, p. 253.

部・東部が多いものの、一八三三年時点に比べ、中央山塊および西部に向けて広がっていることがみてとれる。【図3】

地方出身者がそれぞれの地方のなかでどのような環境に出自を有していたのかは、一九世紀の国勢調査では判明しない^④。ただし、パリ市内北東部のベルヴィル地区について詳細な個別研究を残したジャック・ヌメによれば、同地区に住む地方出身者のうち「農村部自治体」（フランスの統計用語では集住地人口が二千人以下の自治体を指す）に生まれた者の割合は、一八七二年で約六〇パーセント、一九一〇年で四五パーセントであった。また、フオールによれば、市内北東部の煉瓦工場ではその割合は六五パーセント、西部郊外ピュトー市の自動車工場では四七パーセント、印刷工場では二六パーセントであったという^⑤。より近年の研究として、ラトクリフとピエットによれば、出身県の人口構成に比べてパリへの移住

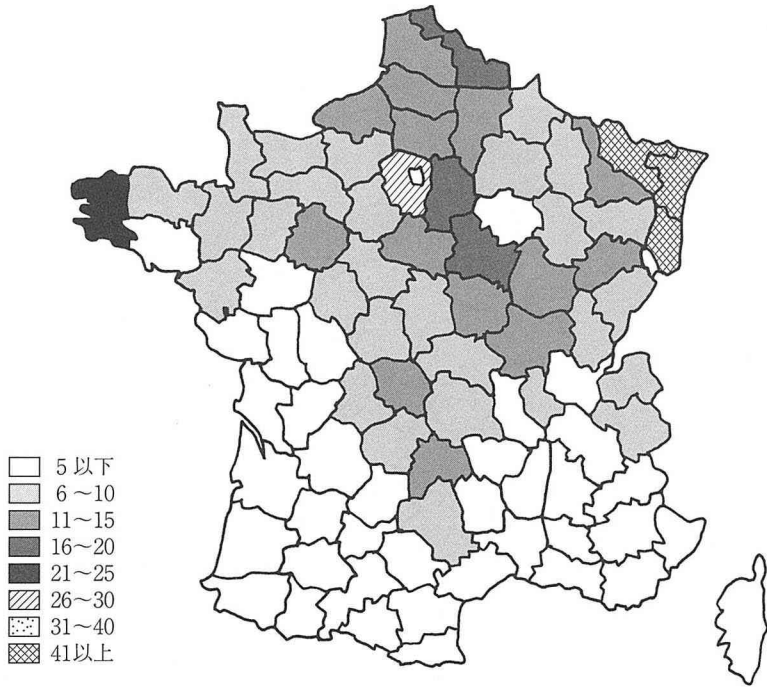


図3 パリの住民の出身県（1896年）

注：数値はパリ住民1,000人あたりの出身者（フランス人のみ）。

出典：Préfecture de la Seine, *Résultats statistiques du dénombrement de 1891 pour la ville de Paris et le département de la Seine et renseignements relatifs aux dénombrements antérieurs*, Paris, Masson, 1894. pp. 628-639より作成

者には都市部出身者が多い傾向が見られるという。^⑥

移住者の性別に関しては、パリ人口全体における男女比からある程度は推測できる。パリの人口において、男性一〇〇人に対する女性の数をみると、一八三一年に一〇二・七四だったのが、一八四六年には九三・六一へと減少するが、それから一〇年後の一八五六年には九九・〇三に戻り、一八八六年には一〇四・二と男性を逆転している^⑦。この増減のかなりの部分は移住者の性別を反映していると考えられる。すなわち、一九世紀前半は男性の割合が優勢であり、後半になると逆に女性の割合が増加傾向に向かうということがある。世紀後半に住み込みの家政婦が増えたことも、この傾向に合致している。

（二）パリ市内での分布

つづいて、移住者の市内でのあり方を見てみたい。

ラトクリフとピエットの研究は、一九世紀前半のパリでは移住者はおおむね市内各所に散住しており、出身地による集住とよびうる現象はまれだったこと、また、同郷人どうしの結婚も少なかったことを示している。^⑧ いっぽう、一九世紀後半から世紀転換期にかけてのパリについては、ファルシとフォールを中心とする研究グループが徴兵文書を体系的に利用した大規模調査をおこなったが、そこでも、パリへの移住者の散住および非同郷婚という傾向が確認されている。^⑨

他方で、市の内部でも移住が頻繁だったことも明らかになっている。とくに世紀後半については、フォールが詳細な研究をおこなっている。一八九一年のパリの有権者名簿に登録されている約四七万人のうち、約八・三万人（二七・七パーセント）は翌年には街区の外に転居していた。^⑩ また、市内南東部のナシオナル街に一八九六年時点で住んでいた七一五人のうち、四六九人は一〇年以内に区外に、一六七人は区内で、それぞれ転居していた。十年間いちども引越さなかったのは一一パーセント、七九人のみだった。^⑪

このように、空間という視点から見る限り、近代のパリは、絶えざる人口流入にさらされつつも、モザイク状の社会にはなっていなかったといえる。

ならば、移住者は、さまざまな特性を捨ててパリという坩堝に溶け込んでいたのだろうか。

フランスでは、移住者が言語をはじめ文化的にどのような特性を有していたのかは、国勢調査などの公式調査からは判断できない。これは、文化的多様性を公式には認めないという、革命以来のフランス国家の姿勢による。先に挙げた一八六三年の調査はきわめて例外的なものである。

もちろん、フランス語以外の言語を母語とする移住者が、移住地でもその特性を維持したという事例はある。たとえば、

ナポレオン期パリの地方出身者について、作家アンリオンは次のような描写を残している。「一五名か二〇名ほどで徒党を組み、布靴を脇に抱え、リムーザン語かオヴェルニュ語らしき言葉を話している」。七月王政期、作家ラ・ベドリエールの記述には、地方出身者と外国人は同じ範疇で認識されている。「建築労働者はあらゆる地方からやってくる。休み時間になるとあらゆる方言が飛び交い、プロヴァンス語の強いアクセント、ロレーヌ語の引きずるような発音、アルザス語の耳障りな言葉などが聞こえてくる。ごく最近のことだが、ビールが好みの味ではないからといってパリの市壁工事を辞めてしまった左官がいた（フランドル人だった）。いっぽう、人夫のうちかなりの者はドイツ出身だ。彼らが来てからあまりにも間がないので、もつとも無知でない者が工事現場で仲間の通訳を務めねばならない」。世紀後半になっても、同様の事態は継続していた。「第一三区）ガール街区の救貧局に勤務する医師たちは、親たちがいうことを理解するのに子どもに訳を手伝ってもらわねばならないことがしばしばあった」^④。

しかしながら、移住者たちの特性がはたしてどの程度存在し、それが彼らのパリ社会への統合にいかに関与していたのかを定量的に測ることは不可能に近い。第一章でも述べたように、本稿がカトリック教会に注目するのは、この問題をできるだけ包括的に検討するためである。

- ① Chevalier. *La Formation*, op. cit., p. 22.
- ② Vigier (Philippe), *Paris pendant la Monarchie de Juillet*, Paris, Hachette, 1991, p. 253.
- ③ Préfecture de la Seine, *Résultats statistiques du dénombrement de 1891 pour la ville de Paris et le département de la Seine et renseignements relatifs aux dénombremens antérieurs*, Paris, Masson, 1894, p. LXII.
- ④ 国勢調査の個々の調査票は、パリに関しては一九二六年以降のものしか保存されておらず。
- ⑤ Jacquement (Gérard), *Belleville au XIX^e siècle. Du faubourg à la ville*, Paris, EHESS/Touzot 1984, p. 224; Faure (Aimé), «Formation et renouvellement du peuple de Paris. Aspects du peuplement de Paris de la Commune à la Grande guerre», 『明治大学国際交流基金事業招請外国人研究者講演録』第一〇号、一九九九年、一一―一二頁。なお、この人口二千という数値は、フランスの公式統計の「農村」と「都市」の区分にあなづかる。
- ⑥ Ratcliffe / Piette, op. cit., p. 103.
- ⑦ Chevalier. *La Formation*, op. cit., p. 269. 移住者において女性が男

性を数で表へようにならぬのは、フランス全体で見られた傾向であった。
 Cf. Moch (Leslie P.), *Moving Europeans. Migration in Western Europe since 1650*, Bloomington / Indianapolis, Indiana University Press, 1992, p. 130.

⑧ 同一県出身者との結婚した事例は移住者の約七人に一人しかなかった。Ratcliffe / Piette, *op. cit.*, pp. 110-111.

⑨ Farcy (Jean-Claude) / Faure (Alain), dir., *La Mobilité d'une génération de Français. Recherche sur les migrations et les démenagements vers et dans Paris à la fin du XIX^e siècle*, Paris, INED, 2003. 邦語では、フォール、前掲論文。フォールは、パリ北西郊外でニエール市の婚姻を一八三〇年から百年にわたって調査してあるが、それによれば、地方出身者のうち同県人と結婚したのは一〇パーセントでしかなかった。Farcy (Jean-Claude), «L'immigration provinciale en banlieue au début du XX^e siècle», in Brunet (Jean-Paul) dir., *Immigration, vie politique et populisme en banlieue parisienne (fin*

XIX^e - XX^e siècle), Paris, L'Harmattan, 1995, pp. 49-68, p. 60.

⑩ 当時のごりお、二〇区、八〇街区 (各区は四街区) からなる、街区の平均面積は約一平方キロメートルだった。

⑪ Faure (Alain), «Les racines de la mobilité populaires à Paris au XIX^e siècle», in Benoit-Guibot (Odile), dir., *Changer de région, changer de métier, changer de quartier. Recherches en région parisienne*, Nanterre, Université Paris-X, 1982, pp. 103-119, 156-157.
 Faure (Alain), «Une génération de Parisiens à l'épreuve de la ville», *Bulletin du Centre d'histoire de la France contemporaine*, no. 7, 1986, pp. 157-173.参照。

⑫ Tulard (Jean), «L'immigration provinciale à Paris sous le premier Empire », *Cahiers d'histoire*, tome 16, 1971, pp. 425-431, p. 430.

⑬ Cité in Chevalier, *Classes laborieuses. op. cit.*, rééd. 1984, p. 496.

⑭ Bonnet (Henry), *Paris qui souffre. La misère à Paris, les agents de l'assistance à domicile*, Paris, Giard et Brière, 1908, p. 54.

第三章 パリにおける同郷会

本章では、パリにおける移住者のあり方を把握することを目的として、同郷会を取りあげ、それについて概略を提示する。

本稿でいう同郷会 *sociétés d'originaires* は、字義通り同郷出身者の組織であるが、その点と、非営利目的の民間団体であるという点を除けば、目的や形態には幅がある。行政に認可申請をおこなって法人格を取得したり、公益性 *utilité publique* を認定される団体がある一方で、明文化された規約を持たず、もっぱら会員同士の親睦を深めることを目的とする団体もあった^①。したがって、同郷会の数や規模、さらには活動を網羅的に示すような史料は、ほぼ存在しない。この

では、いくつかの先行研究のほか、同時代の証言に依拠しつつ、その粗描を試みる。

同郷会が明確なかたちで現われるのは、一九世紀のことである。もちろん、それ以前にもパリのような都市には域外から恒常的に人口流入が起っていた。だが、移住者たちを結びつける要素において、同郷性は決定的ではなかった。前近代における移住者たちの団体としてあげられるのは、職人組合^{コンミュナリゼ}である。職人組合は、巡歴修養をおこなう職人たちの互助組織であり、その起源は少なくとも中世末にさかのぼる。^②この組合には、リムーザン地方出身者が多かった石工の組合のように、特定地方出身者の互助会としての性格を持つものもあつたが、基軸は職業上の結合であつた。フランス革命と工業化のはじまりを経て徒弟制や職人の共同性が揺らぐようになると、職人組合は衰退に向かう。それと入れ代わるように出現するのが、同郷会である。

パリでの最初の同郷会は、一八二五年に設立された北部出身者の会、「ノールの子の会 Réunion des Enfants du Nord」だといわる。提唱者は、いずれも俳優であるF・タルマとJ・デュシエノワ、そして作家デボルド・ヴァルモル夫人の三名であつた。タルマは、自身はパリ生まれだったが、父親が北部地方の出身であり、ほかの二名は現在のノール県に生まれていた。初代の会長は、革命・ナポレオン期の軍人であり、七月王政期には一時期首相を務めるモルチエ元帥で、彼もまた北部はカトー・カンブレジの生まれであつた。同会については、一八九〇年代まで存続したことをのぞき活動の詳細は不明であるが、提唱者の顔ぶれを見るかぎり職人組合とは異質であつたというべきであろう。^③

つづいて、一八三〇年代には、当時はサルデーニャ王国の一部であつたサヴォワの出身者のため「サヴォワ博愛協会 Société philanthropique savoisiene」および「サヴォワ連合 Union savoisiene」が設立された。一八四四年には、ブルターニュ地方出身者のための「コート・デュ・ノール協会 Société des Côtes-du-Nord」が設立されている。この三協会は一九一〇年時点でも存在していた。^④

これら地方で話される言語について確認しておきたい。フランス北部では、現在のノール県のさらに北部にあるダンケ

ルク市一帯で、オランダ語に近いフランデレン語が話されていたが、そのほかは、いわゆるフランス語が属するオイル語が日常語であった。サヴォワの場合は、地元の言語として西ロマンズ語群に属するサヴォワ語があったが、フランス語も近世以来定着していて、住民は両言語を用いることができたといわれる。^⑤ブルターニュ地方では、第一章でも述べたようにブルトン語が存在するが、コート・デュ・ノール県では西部でブルトン語が日常語であった。

活動に関しては、サヴォワ博愛協会のある程度判明している。この協会は、みずからの目的を、「パリにいるサヴォワ出身者を互いに近づけること、職や仕事が不足する場合にはそれを斡旋すること、欠乏状態にある人を助けること、同郷人が病床にあるときには治療すること、不幸な状態に陥ったり、病身になった者がいれば、会員であろうとなかろうと、彼が帰郷できるよう取りはからうこと」と規定していた。^⑥

つづいて一八六〇年代になると、中央山塊地方出身者のための「アヴェロン連合 Union aveyronnaise」と「カンタル連合 Union cantalienne」が結成されている。枠組みとなったアヴェロン県とカンタル県は、言語ではいずれもオック語圏に入る。アヴェロン連合は、同県出身で、パリで実業家として成功を収め、のちに保守派の上院議員となるメランの提唱で設立された。実際の活動は、アヴェロンの県都ロデズの司教総代理トウゼリが、アヴェロン出身の聖職者たちの協力を得つつ取り仕切っており、カトリック系の協会であった（次章で述べる「事業」にあたる）。おもな活動としては、病人の看護、困窮者への食料や物資の配布などをおこなっていた。^⑦カンタル連合も、活動の詳細は不明ながら、カトリック系であったとみられる。

一八七〇年設立の「コレーズ協会 Association corrézienne」は、リムーザン地方のオック語圏地域、コレーズ県の出身者の団体である。協会の設立の直接のきっかけは普仏戦争であった。提唱者は、もと税務官吏で文筆家のヴァリアル・ド・ラメイエルと、同県選出の正統王朝派下院議員レオン・ド・ジュヴェネルの二人であった。およそ二〇〇名が出席していた設立総会では、コレーズ県出身兵の疾病や負傷に際して手当をおこなうこと、同県の住民に向けて「フランス全県が

首都防衛に向かつて進むことの絶対的必要性」を示すこと、の二つを使命として採択した。普仏戦争の休戦協定が結ばれた後も、協会は存続することを決め、上京後に生活苦に陥っている同県出身者を助けること、とりわけ彼らの帰郷を促すことを目指した。二〇世紀初頭の数値であるが、一九〇〇年から一九一二年の間に協会が帰郷させた県人は九〇一名、同期間に県人に配布された物資は計一五万フランにのぼる。^⑧

第三共和政期でも同郷会の設立はつづき、かつ増える傾向にあつたとみられる。一八八〇年には、ロゼール県選出上院議員テオフィル・ルセルによって「ロゼール協会 Association lozerienne」が設立された。同県は、カンタルやアヴェロンと同じく中央山塊地方の県であり、オック語圏に属していた。協会の目的として掲げられたのは、(一) 郷土愛にもとづく親睦、(二) 生きてゆくうえでの互助、(三) 悪弊からの防衛、(四) 郷土の利益の擁護、(五) 同郷者による同業組合や文芸協会の設立であつた。ロゼール協会は当時にあつて世俗共和派色が強かつた。カトリック側は、遅れて一九〇一年、対抗して「ロゼール連合 Union lozerienne」を設立することになる。^⑨

以上、同郷会の事例をみたが、個々の事例を超えて重要なものは、全体としてどれほどの数や規模の団体が、いかなる活動を展開していたのかである。この点について、管見のかぎりもつとも網羅的な記録が、一九一〇年、カトリック系の隔週刊誌『通信員 *Le Correspondant*』にダル伯が掲載した論考である。^⑩ここで、その記述を紹介しておきたい。

ダルによれば、文芸や政治に特化した団体、親睦の機会を与えるだけの団体など、「慈善 bienfaisance」をおこなわなものを除けば、当時のパリでは三二〇の同郷会があつたという。ダルはそれを、形態によって相互扶助会（ないし共済組合、*Sociétés de secours mutuels*）と協会 *associations* の二種類に分けている。

相互扶助会は、職人や労働者が組織した一種の「講」であり、中世以来の信心会コンフレリの流れをくむ。社会保障が未整備ななか、一九世紀前半に設立が盛んになり、世紀半ばから後半にかけて法的な位置づけもなされた。^⑪ 地方出身者を主たる会員とする会は、ダルによれば七六存在し、会員合計は二万五千から三万ほどと見積もられている。

協会について、ダルはこれをさらに親睦会 associations amicales と慈善協会 associations de bienfaisance とに区別する。前者は親睦が主で困窮の際の扶助が従、後者はその反対ということであるが、力点の違いによるものであろう。数の上では、ダルの試算では親睦会が二〇〇、慈善協会は三四と、前者が多い。慈善協会のうち、二一はカトリック系、一三が世俗系であった。会員数については、ダル自身も概数であると断りつつ、親睦会の会員が七万ないし八万、慈善協会の協力者 souscripteurs が三万五千以上とされている。

これら同郷会の組織単位は、県単位の会がもっとも多く一五二、^⑧ ついで県を超える単位で組織されている会が八七、県より小さい単位のものが七一であった。【表一】

同郷会の活動は、先行研究などによればおおよそ以下のようになる。

まず、定例会集として、月ないし週に一度の集会をおこなう。たいていは土曜か日曜で、場所は同郷人が経営するカフ

表1 同郷会の内訳

分類	相互扶助会					協 会														
						親睦会			世俗系慈善協会			カトリック系慈善協会		協会合計						
	種別 組織単位 県を超える地域	公認 認可	認可 外	合計	公認 認可	認可 外	合計	公認 認可	認可 外	合計	公認 認可	認可 外	合計	公認 認可	認可 外	合計				
州	5	5	3	3	6	1		1		1			4	4	4	7	11			
県	17	1	18	12	22	34	2	1	2	5	2	4	8	14	4	17	32			
県以下 の地域	35	1	36	32	77	109	1	1	2	4		1	2	3	1	34	81			
合計	0	73	3	76	0	56	144	200	3	6	4	13	2	5	14	21	5	67	162	234

出典：Daru (le comte), Sociétés et associations de provinciaux de Paris, Paris, 1910, p. 73.

エもしくは居酒屋か、あるいは部屋を借りるかする。また、定例集会のほか、年に一度か二度、祭りを実施する。そこには会員のほか、その家族も参加できる。

会合とは別に、困難な状況にある同郷人に対して、就職斡旋、衣服や食料の支給、病気の際の看護をおこなう。とくに、就職の斡旋は重要な位置を占めており、同郷会の機関誌はしばしば求人広告を掲載していた。たとえば、ヴォージュ県の協会は、会員のなかにパリの公共事業の大口請負業者がいて、その業者と協定を結んでいた。業者は団体が推薦する労働者を雇用し、もし労働者の働きぶりが不十分であれば協会は業者に金銭的な補償をすることもあった。¹⁰ほか、帰郷や国外移住の援助もおこなっていた。

このように、団体の実質的な活動の中心は互助であった。いっぽう、本稿の問題提起に関連して重要なのは、同郷会の活動のうち言語にかかわるものである。筆者が閲覧できた史料に関する限り、そのような活動はまったくといってよいほど目立たない。もちろん、ここに挙げた団体のほかに、先にふれたように文芸を活動の中心とする団体が存在して、言語や文化にかかわる活動を中心に据えていた。だが、それらは文筆活動や講演会の組織に終始するエリートのサークルであり、民衆層には基本的に関与せず、本稿の問題意識にとってもさほど意味を持たない。民衆層を対象としたと思われる団体にとって、言語や習慣の差異を埋めよう、それを通じて移住者の受け皿となり都市社会への統合を促そうという姿勢は、ほとんど見受けられなかった。この点を、まずは確認しておきたい。

世紀転換期のフランスでは、地域主義が隆盛を見、またパリでも同郷会が百花繚乱の様相を呈したのだが、その基盤に文化的差異を見いだすことは困難である。このことは、同郷会の隆盛の理由や背景をどう考えるべきかについて、重要な問題を提起しているように思われる。

① 近代フランスの諸団体については、高村学人『アソシエーションへの自由——（共和国）の論理——』勁草書房、二〇〇七年を参照。

② 職人組合については、谷川稔『フランス社会運動史——アソシエーションとサンディカリズム——』山川出版社、一九八三年、第一章。

- ② Durel (Petrus), «Les sociétés provinciales», *La Nouvelle revue* tome 46, 1907, pp. 70-71; Daru (le comte), «Sociétés et associations de provinciaux de Paris», *Le Correspondant*, 10 février 1910, p. 575.
- ③ Daru, art. cit., 10 février, p. 575.
- ④ サヴォワロワの「上垣」は「一九世紀サヴォワにおける歴史とアナンチヤヌ」服部春彦、谷川稔（編）『フランス史からの問』山川出版社、二〇〇〇年、二二四—二四五頁を参照。
- ⑤ *Manuel des œuvres et institutions religieuses et charitables de Paris*, Paris, Librairie Poussielgue et Frères, 1867, p. 158.
- ⑥ Soulé (abbé Jules), «La paroisse aveyronnaise de Paris et d'Ille-de-France», *Revue du Rouergue*, no. 47, 1996, pp. 347-374; Bételle (Roger), «Solidarité et amicalisme rouergat avant 1939», *Revue du Rouergue*, no. 47, 1996, pp. 319-346.
- ⑦ Beaubatie (Gilbert), «Une société d'originaires, L'association corrézienne de Paris», *Actes du 53^e Congrès de la Fédération des sociétés savantes du Centre*, Guéret, Société des sciences naturelles et archéologiques de la Creuse, 1995, pp. 97-109; Manigand (Christine), «Henri de Jouvenel, Paris et la Corrèze», *Limousins de Paris*, op. cit., pp. 41-51.
- ⑧ Courtois (Jean-François), «L'émigration lozérienne prise en charge par l'Église catholique (1880-1960)», *Revue du Gévaudan*, 2^e trimestre 1994, pp. 1-11. ナンパール・ルヤルは「第三共和政初期の児童保護政策において重要な役割を果たした人物である。詳しくは、岡部造史「フランスにおける乳幼児保護政策の展開（一八七四—一九一四年）——ノール県の事例から——」『西洋史学』二二五号、二〇〇四年、一—一八頁、同「フランス第三共和政における児童保護の論理——「不幸な子供」をめぐる議論を中心に——」『メトロポリタン史学』第三号、二〇〇七年、一四—一六四頁を参照。
- ⑨ Daru (le comte), art. cit., 10 février 1910, pp. 561-584, 25 février 1910, pp. 691-706. 論考は同年、別冊子「同郷会の一覧などを新たに加えて刊行された。以下の参照はこの冊子からのものである。Daru (le comte), *Sociétés et associations de provinciaux de Paris*, Paris, 1910.
- ⑩ 相互扶助会については、高村、前掲書のほか、中野隆生「都市労働大衆とアンシアシオン」綾部恒雄（監修）、福井慈彦（編）『アンシアシオンで読み解くフランス史』山川出版社、二〇〇六年、一三〇—一四三頁。喜安朗「近代フランス民衆の〈個と共同性〉」平凡社、一九九四年、一六四—一八四頁。
- ⑪ なお、ダルは地理的分布についても分析を試み、同郷会を県単位でプロットした全国地図を添付している。だが、先に述べたように組織単位は多様であり、その正確には疑問符がつくので、本稿では紹介を控える。Daru, op. cit., annexes nos. 13-15.
- ⑫ Daru, op. cit., p. 29.

第四章 カトリック教会と都市移住者

本章では、カトリック教会が地方からの移住者をどのように認識し、どのような対応をおこなったのかを、大司教座の

姿勢、教会関連組織の活動の二面から検討する。

(一) 大司教座の姿勢

本稿では、大司教座の認識を知るべく、『パリ宗教週報 La Semaine religieuse de Paris』を調査した。『宗教週報』はパリのほか多くの司教区で刊行されており、司教座の関与の程度には幅があるが、教会の公報といえるものであった。パリのそれは、一八五三年に創刊されたが、提唱者は信徒であり、司教区がそれにお墨付きを与えるかたちをとった。読者としては聖職者のほか一般信徒も想定されており、発行部数は当初五千で、一八六一年には一万五千に達していた。記事の内容は、司教区の指針、人事異動、各教区の彙報、さまざまな行事、さらには教皇庁の動静までが含まれていた^①。

『パリ宗教週報』を見るかぎり、おおむね一九世紀のあいだは、移住者への言及は、地方出身者、外国人いずれに関しても多くない。とりわけ、彼らの言語的ないし文化的な特性についての言及はまれである。また、そうした分野で教会が活動する必要も、一九世紀のあいだは目立つては主張されない。

『週報』では、同郷出身者が復活祭など教会暦の節目に特定の聖堂に集まるさまが報じられることがある。だが、記事はそのような集まりを外在的に描くにとどまる。たとえば、一九〇二年六月二十八日号では、パリ・モンマルトルでプルトーニュ出身者たちがおこなった大規模な巡礼が取りあげられる。記事によれば、パリ大司教の司式のもと、参加者は約四千人で、「巨大なバシリカ聖堂はプルトーニュ出身の男女であふれんばかりであった。なかには民族衣装を着ているものもいた。プルトーニュ五県の代表たちが三色旗を掲げる真んかに、アルモリカの伝統の幟がはためいていた^②」。一九〇三年一月一四日の記事は、同じモンマルトルのサクレ・クール聖堂に八千人ものプルトーニュ出身者たちが巡礼に向かったと報じている。彼らの多くは、市内北東部のノートル・ダム・ド・ラ・クロワ・ド・メニルモンタン教区、南東部のノートル・ダム・ド・ラ・ガール教区や、北西郊外のアニエール教区などプルトーニュ出身者を多く抱える教区から来

ており、巡礼の際にはブルトン語で歌っていたという。「それは彼らにとつて、生まれ故郷の復活のごときものであった」^③。だが『パリ宗教週報』では、言語への言及はこの程度で、頻度もきわめて低い。また、移住者が仲間内で連帯することは自明であるかのように述べられているが、何がその連帯を作りだしているのか、どこまで必然性があることなのかについては、『週報』はほとんど語らない。

もとより、大都市への移住という選択に対して、教会はおおむね否定的だった。紐帯を失った移住者たちが、信仰をはじめ伝統的な価値から離脱し、都市の悪弊に染まっていくという懸念を強く抱いていたからである。第一次大戦直前に書かれた、「パリの福音伝道と移住者」と題された匿名の論説にも、そのような認識はうかがえる。

それらの人びと〔パリに生きる地方出身者〕は、人生のもっとも活動的かつもっとも長い期間を、異質な環境のなかで過ごす。いわば、ほんらいの環境の外にいただけに、根のない状態デラシネになり、だからこそ地元テリトワールの伝統のどれかに再びつながる必要があるのである。〔中略〕彼らには信仰心もなく、侵略者のごとくパリに押し寄せ、パリ人をつねに数で凌駕している。そのため、彼らを抑止できないかぎり、布教の努力は埋没してしまふだろう。^④

このように、移住という現象を否定的に評価した後、同じ論説は移住者への対処について次のように論じる。

〔中略〕祭りは、故郷の思い出を心のなか、記憶のなかに蘇らせる。服装、歌、地元の習慣。扶助事業は、病人の救済、貧者の救済、就業斡旋、帰郷など、多くの優れた貢献をなしている。〔中略〕地方出身者の協会は、病人や困窮者や障害者を助けているが、それと同時に、健全な人、まじめで活力ある労働者の方に向かわねばならない。そして、彼らが反宗教的、革命的な集団のようなどころに行かなくてもすむように、経済的、社会的な諸組織を提供せねばならない。^⑤

たしかに、地方出身者の文化的特性への言及はみられる。しかし、主たる関心は彼らの信仰心の維持であり、また、彼らを疾病や貧困から救い出すことであつた。引用箇所の後では、困窮者の扶助に専心する現状から脱する必要性が説かれるが、そのことは、現実が何であつたかを如実に示してもいる。

(二) 事業

一般的にいつて、教会の活動は司教座の認識に必ずしも沿うわけではない。本節では、「事業 *œuvres*」のうち地方出身者を対象としていたものを検討する。事業とは、信徒や末端の教区などの提唱で作られ、教会が承認した組織を指す。慈善をおこなうものが多いが、「慈善事業 *œuvres de bienfaisance*」という呼称があつたように、それに限定されるわけではない。地方出身者向けの事業は、前章で述べた同郷会に含まれると考えるとよい。

第一章でも紹介した、第二帝政期のパリ司教区を研究したブドンは、移住者と教会の関わりも取りあげている。そのブドンによれば、移住者事業のうち組織化が早かつたのは、ポーランド人向け事業であつた。七月王政期の一八四二年には、ポーランド人亡命貴族の受け入れ組織が設立され、市中心部サン・ロック教区を拠点に活動をはじめた。第二帝政期になると、「ポーランド事業 *Œuvre polonaise*」「ポーランド・カトリック事業 *Œuvre du catholicisme en Pologne*」が相次いで組織され、今度は貧困層の扶助に重点を置いて活動を展開した⁶⁾。

ドイツ人については、移住者の増加を目の当たりにしたパリ大司教アフルみずから事業の設立を呼びかけ、五〇年代半ば、ドイツの司教の助力もあつて、具体化する。ここでいう「ドイツ人」は広義に理解されており、対象には当時フランスの一部だつたアルザス・ロレーヌの出身者も含まれていた。また、学校にはパリ市や公教育省のほか、オーストリア皇帝からも財政的支援があつた⁷⁾。ほか、ベルギー人（フランデレン語圏出身）やイタリア人のための活動も、第二帝政下には存在した。

これら団体の設立提唱者は、個人であったり出身地の聖職者であったりするが、パリ司教区の側は、一部の例外を除いて消極的で、司教区全体の指針も定めていなかった。また、言語に関しては、既存の教区との兼ね合いから、フランス語の使用には否定的であったとみられる^⑧。

地方出身者を対象とした事業も、この第二帝政期が黎明期であった。前章で述べたアヴェロン連合、カンタル連合のほか、「サヴォワ事業 [Œuvre savoisienne]」「パリ・ブルターニュ人事業 [Œuvre des Bretons de Paris]」「リムーザン人のための事業 [Œuvre en faveur des Limousins]」が、いずれも一八六〇年代に設立された。サヴォワ事業の設立を求めた一司祭は、「サヴォワワから出る人びとはつねに多数いるが、田舎から来た若者が多い。彼らはサヴォワワでは方言で話すのに慣れていないため、パリでなされる高尚な説教をまったく理解できないし、出席することさえできない。だから、彼らに夕方、簡単によいから教育を施すこと、そして、彼らの方言を理解できる司祭を置くことが必要である。」^⑨しかしながら、実際の活動の段になると、宗教教育のほかは就業斡旋が中心であった。

なお、当時、地方出身者と外国人を同列に扱う傾向が見られたことを指摘しておきたい。市内東部のサント＝マルグリット教区の司祭は、移住者向け事業に否定的な彼自身の見解を、次のように表している。

ブルターニュ人はフランドル人よりも多いが、いまにそのブルターニュ人のために礼拝堂が必要となるだろう。さらには、イタリア人やオヴェルニュ人にも必要となるだろう。^⑩

地方出身者向け事業も、同郷会が全体としてそうであったように、一八八〇年代から設立が増える。一九一〇年代のものと思われる一史料には、パリに二一の地方出身者向け事業があったとしている。^⑪これは、第三章で引用したダルがカトリック系慈善協会として挙げたものと同数であるが、両者に共通するのは一五団体で、六団体がいずれかにしか記載され

ていない^⑫。ここでは、先行研究があり、史料も比較的残されているブルターニュ地方出身者向け事業の例を見ておきたい。ブルターニュ地方は、近代フランスにおいてカトリシズムの政治的・社会的影響力が強かった地域である一方、ケルト系のブルトン語（ブレイス語）話者を西部に多数抱えてもいた^⑬。二〇世紀初頭でも、フランス語の説教を理解できる信徒は数十名に一人しかいなかったという記録もある^⑭。一八九〇年、宗教相ファリエールはブルトン語での説教を禁止しようとしたし、二〇世紀初頭に厳しい反教権主義的政策を展開したコンブ内閣もブルトン語での説教や宗教教育を禁止し、背いた司祭の俸給を停止したほどであった^⑮。

世紀転換期のバリでは、ブルターニュ地方の出身者を対象とした事業には、大きく二団体が存在した。ひとつは「ラ・ブルターニュ」、もう一つは「ブルターニュ教区 [La Paroisse bretonne]」である。

「ラ・ブルターニュ」は、一八九一年、パリやその周辺に住むブルターニュ出身者を援助することを目的に結成された。ブルターニュ出身者に対しては、先にふれた「パリ・ブルターニュ人事業」がすでに存在していたが、「ラ・ブルターニュ」は一八九四年に同事業を併合する。会員数は、一九〇〇年で約三千、一九〇五年で約一万だったという。会費は年に最低六フラン、経済状態に応じて五〇、一〇〇、五〇〇フランを支払うことになっていた。会長は、シャトブリアン伯ついでケルドレル將軍が就き、副会長は社会カトリシズムの代表的人物アルベル・ド・マンが務めた。なお、会報は一九三九年で終わっている、その頃まで存続したとみられる^⑯。

もう一つの「ブルターニュ教区」は、一八九七年、ブルターニュ地方ヴァンヌ司教区の司祭カディックにより設立され、パリ六区のノートルダム・デ・シヤン教区を拠点にしていた。会員になるには、みずからブルターニュ出身か、あるいはブルターニュ出身者と結婚していることが条件とされていた。会報は一九二九年まで刊行されている^⑰。

この二団体は、いずれも、モンパルナス周辺を本拠地としつつ、北部郊外のサン・ドニ市のように、ブルターニュ出身者が多く住む地域にも足場を有していた。活動の中心は、現金もしくは衣料などを支給する物的援助であった。物資は、

修道女や女性後援者が自宅に持って行くか、あるいは本部で支給するかした。ほか、同郷人に対する就職の斡旋、病人の訪問・看護も重要な活動であった。

文化的な活動については、夜の集い、歌・祈りなどの集まりがおこなわれていたほか、子どもたちを対象に週に一度ほどブルトン語講座が開かれていた。また、ブルターニュの伝統的な祭礼である「パルドン（守護聖人）」祭など、宗教活動も活発であった^⑩。

ここでも、言語的・文化的特性がどの程度のもだったのか、共生や統合において障壁を構成するようなものだったのかを定量的に測ることは困難である。だが、少なくとも、活動のなかで文化的なものが占める割合は多いとはいえない。「ラ・ブルターニュ」協会の一九〇六年の総会では、「訪問家族一九二〇、洗礼六四、堅信礼一二、婚姻二二、帰郷三二、里子三七、病人訪問二五二」という数値が挙げられている。言語や文化の差異を埋めるような活動は、ここからはうかがえない^⑪。

移住者を対象とした事業は、基本的には互助ないし扶助のための組織だった。それが目指したのは、あくまで個人が出自やその価値観を失わないようにすることであって、文化の維持でもなければ、首都の社会に統合ないし挿入されることもなかった。

二〇世紀初頭には、若干の変化の兆しが見える。一九〇二年と一九〇九年には、「パリ・地方出身者事業総会」が開催される。また、一九一三年二月におこなわれた司教区総会では、テーマが教区とされ、「教区と地方出身者」に関連する二報告がなされている。つづく一九一三年四月には、司教区内の組織として「パリ移住者センター」が設立される。これは、先立つ一九一二年に教皇ピウス一〇世が、人口移動の活発化を受けて発した教皇自発教令に呼応したものであった^⑫。関連史料によれば、センターの目的は以下のようなものであった^⑬。

・フランスの諸地方や外国からセーヌ県に移住してくる動きに歯止めをかけること。

・彼らの帰郷を促すこと。

・既存の組織を發展させ、あるいは新たな組織を作ること、移住者を孤立から救うこと。

・宗教的・慈善的・社会的・経済的・職業的な組織を設立するよう促すこと。

ただし、同センターは「貧困者に援助をおこなう窓口ではない。援助を配布することはしない」と断られてもいた。²³

もつとも、このセンターが実際にどのような機能したのかについては、司教区に残された史料からは、明確には把握できなかった。ただ、大司教座会議の議事録を第一次大戦までの時期についてみたかぎりでは、センターは重要な存在ではなかったように思われる。²⁴ 最終的な判断については、さらに研究を進めた段階まで保留せねばならない。

一方で、一九一三年の司教区総会で地方出身者向け事業について報告したラス・カースはこう述べている。「もし事業に経済的余裕があるのであれば、郷里の司祭オセニを雇うことであろう。方言が話せ、パリにやって来た地方出身者に会いにゆけるような司祭を。それはなして難しいことではあるまい」。²⁵ ここで、言語に関わる活動の優先順位が高くなかったことがうかがえる。

① 宗教週報に『Poulart (Emile), Les Semaines religieuses.

Approche historique et biographique, Paris, FNSP, 1958.

② *La Semaine religieuse de Paris*, 28 juin 1902, pp. 1016-1017. 各々ハ

ルターニト五郎とマ、フイニニニール、コートマテニニール、セル
ビマン、イルニニニニール、ロワールニニニニール、フニニニールの五郎
を指すに思われる。

③ *Ibid.*, 14 novembre 1903, pp. 689-690.

④ *Ibid.*, 21 décembre 1912, p. 842.

⑤ *Ibid.*, pp. 844-845.

⑥ Boudon, *op. cit.*, pp. 165-169.

⑦ *Ibid.*, pp. 170-174.

⑧ *Ibid.*, p. 183.

⑨ *Ibid.*, p. 185.

⑩ *Ibid.*, p. 185.

⑪ Archives historiques de l'Archevêché de Paris (AHAP), IK2-4, Broglie (Louis de), «Rapport sur les œuvres provinciales à Paris», p. 230.

⑫ 共進会一五団体は以下通り。西福連会 Union de l'Ouest、ナ
ハニト女社慈善連会 Union charitable des dames d'Auvergne、ナ
ハニロン連会、ピリニエ連会 Union pyrénéenne、ブルターニト連会
Union bourguignonne、ブルターニト、ブルターニト教区、ス
リ・フニニエ入連会 Union des Dauphinois de Paris、フニニニト

- ロンタン著『Euvre franc-comtoise』リトキーン・ナルス女性協会
 Association des Dames limousines et creusoises^① 石上・石田キーン
 ン Cercle des Maçons et tailleurs de pierre^② ロキーン著『リ
 ン・トキーン著 Union lyonnaise et forézienne^③ 坂ノキーン
 ヲ・キーン著 Union bas-normande et percheronne^④ キン
 フ・カトリック連合 Alliance catholique savoisienne^⑤
 ⑥ ブルターニ地方の歴史のこぼれ 原典『ノキーンの水脈』講談社
 二〇〇七年参照^⑥
- ⑦ *La Semaine religieuse de Paris*, 18 avril 1903, pp. 632-633.
 ⑧ Cholvvy, art. cit. : *La Semaine religieuse de Paris*, 11 avril 1903, p. 590.
 ⑨ 以十 AHAP IK2-3, Congrès diocésain de 1909, papiers dactylographiés, p. 29 : Comte (Béatrice), Deux associations d'aide aux Bretons de Paris : La Paroisse bretonne et la Société La Bretagne, 1863-1939, mémoire de maîtrise, Université Paris I, 1979 : *La Semaine religieuse de Paris*, 16 septembre 1905, pp. 408-409.
 ⑩ 以十 Isabelle (Etiennne), *Les œuvres provinciales* *Le Sillon*, 10 mars 1900, p. 175 : Cadic (François), L'Emigration bretonne vers Paris, *L'Euvre de la Paroisse bretonne*, Imprimerie de l'Euvre des pauvres du Sacré-Cœur, 1899 : Comte, *op. cit.*
 ⑪ Moch (Leslie P.), "Networks among Bretons ? The Evidence for Paris, 1875-1925", *Continuity and Change*, 18-3, 2003, pp. 431-455 : id., "Migration and the Nation. The View from Paris", *Social Science History*, vol. 28, no. 1, 2004, pp. 1-18 : Brunet (Jean-Paul), *Saint-Denis, la ville rouge, 1890-1939*, Paris, Hachette, 1980, pp. 24-27, passim.
 ⑫ Comte, *op. cit.* キーン著『こぼれ』原・前掲書^⑥ 五一頁。
 ⑬ *Ibid.*
 ⑭ Prévotet (Jacques), *Quelques sources relatives à la pastorale des étrangers dans la banlieue parisienne au XX^e siècle (1913-1961)*, in Boutry / Encrevé, dir., *op. cit.*, pp. 217-230.
 ⑮ *La Semaine religieuse de Paris*, 19 avril 1913, p. 560.
 ⑯ *Ibid.*
 ⑰ AHAP, Registres du Conseil de l'Archevêché de Paris.
 ⑱ AHAP, IK2-4, Compte-rendu, 19 février 1913, p. 240.

結びに代えて

本稿の導入部で述べたように、近代フランスのカトリック教会は、地域語・地域文化の擁護者という側面を持つ。しながら、地方からの移住者が間断なく流れ込む一九世紀のパリでは、大司教座も教会関連団体も、移住者の「受け皿」としての機能がある程度は果たしつつも、彼らの言語的・文化的な特殊性に言及することはまれであった。これについては、おそらく二通りの解釈がなされるだろう。ひとつは、パリに移り住んだ地方出身者は特殊性を持っていなかったとい

うものである。それは、出発地においてある程度の選抜がなされた結果かもしれないし、あるいは到着地の言葉や文化をすぐに身につけたのかもしれない。もうひとつは、そのような特殊性が重要なものとは認識されなかった、というものである。

前者については、本稿で述べたように、特殊性を示唆する史料も一方であることから、パリ全体でみればそのような特殊性が強くなかったということになるだろう。もつとも、だとすればなぜ地方出身者向け事業や同郷会が組織されたのか、という疑問が生じる。同郷会が叢生する一九・二〇世紀転換期のフランスは地域主義の隆盛を経験するが、その意味や背景について問う必要がある。

この点に関連して、同郷会の対象範囲が言語圏と一致していないケースが少なくないことを指摘しておきたい。たとえば、首都圏のブルターニュ出身者向け週刊誌『パリのブルターニュ人 *Le Breton de Paris*』には「故郷のニュース」欄があるが、そこにはブルトン語圏と非ブルトン語圏がともに含まれている。また、別の月刊誌『ブルターニュの荒野野』²⁸ *Lande bretonne*』には、「外に移住した同郷人の数多くは、『向こう（故郷のこと）』で起こっていることを知りたいとも思っているだろう。われわれの通信のこの頁をブルターニュ五県で起こっている主な出来事にあてれば、そのような思いに答えられるだろう」²⁹。

ただ、もうひとつの可能性、すなわち、特殊性が重要であるとは認識されなかった可能性も考えておかねばならない。まず、パリ大司教座は、閲覧した史料のかぎりでは、都市／農村ないし伝統／近代という枠組みで思考していた傾向が強く、それ以外の面での移住者の特殊性に目が向けられていなかった可能性がある。だとすれば、教会⇨地方文化の擁護者というイメージは、少なくともパリに関しては否定される。

じつは、やや後の時代を扱った別の研究が、異なる観点からこの第二の解釈を示唆している。それは、地理学者フランソワーズ・クリビエのグループが、「被雇用者国民老齢保険公庫 *Caisse nationale d'Assurance vieillesse des travailleurs*

salaries」のパリ地域の資料をもとに、一九七二年に退職して年金生活に入り、かつパリ圏に住んでいる集団を対象としておこなったライフサイクル調査である。^②この集団は、世紀初頭に生まれているため、本稿の対象となる人びとよりは後の世代に属するし、そもそも文化的特性の析出を主眼とした研究ではないが、他に類のない調査であるため、その結果をここで簡単に紹介しておきたい。

まず、男性の五九パーセント、女性の六四パーセントはパリに親族がいた。パリで誰も知らなかったのは二〇パーセントのみであった。就業については、最初の仕事は、男性の二八パーセント、女性の三四パーセントが親族を頼って、また男性の二一パーセント、女性の九パーセントがパリ在住の同郷人を頼って、それぞれ見つけていた。職業斡旋所やアナウンスなどに頼ったのは、少数派であった。

研究では、同郷会の役割は重要ではなく、むしろ家族や同郷出身者の役割の方が大きかったという傾向が出ている。調査対象者は、同郷会主催の行事に出かけることはあっても、そのメンバーになることはまれであり、また、地方のアイデンティティもまもなく喪失したという。

ここで注目したいのは、聞き取り調査でのやりとりでも文化的な差異にはほとんど言及されていない点である。対象となった集団には、地方出身者はもちろん、外国人も含まれている。文化的な差異に対する認識が、そもそも現在とは異なっていた可能性があるのである。

以上はあくまで仮説である。別の視点、とりわけ都市における初等教育の研究を通じて、それを検証する必要がある。他日を期したい。

① *Le Breton de Paris. Journal hebdomadaire paraissant le dimanche. Organe des intérêts bretons. 1906 : La Lande bretonne. Organe mensuel de l'Union fraternelle des Bretons de Paris. no. 1. juin 1905.*

pp. 45. なお「ブルターニュ五県」という表現については、第四章

② 注③を参照
Cribier (Françoise), *Une génération de Parisiens arrive à la*

revraie, Paris, Cordes-CNRS, 1978 : Cribier (Française) / Rhein provinciaux venus à Paris dans l'entre-deux-guerres», *Ethnologie* (Catherine), «Migration et structures sociales. Une génération de française, 10-2, 1980, pp. 137-146.

【付記】 本稿は、科学研究費補助金 基盤研究 (C)、平成一九一二年、課題番号一九五二〇六三五、「第三共和政前半期 (一八七〇—一九一四年) のパリにおける地方出身者と宗教」の成果である。

(徳島大学准教授)

bakufu jurisdiction and the castle towns of the *fudai* lords functioned in a coordinated fashion, and the *fudai* lords stationed in the region assisted in preparation for emergency action in the western provinces.

However, from the end of the 17th century through the beginning of the 18th the *bakufu* altered its previously held military strategy, reorganizing its rule throughout the nation, including the Kamigata region. As a result the castle towns of the *fudai* domains that had strongly held the character of military and supply bases came to be political and economic strong points. Furthermore in the Kamigata region the dual system of rule, i.e., that of the *Edobakufu* and that of each local domain or individual lord, began to develop.

Migrants et culture dans une société urbaine:
le cas des provinciaux à Paris au XIX^e siècle

par

NAGAI Nobuhito

Au XIX^e siècle, Paris a connu une croissance démographique vertigineuse: la population de la capitale française a quintuplé en cent ans, atteignant à son sommet 2,7 millions d'habitants. Cette expansion rapide est due, pour une grande partie, aux flux d'immigration de provinciaux. Dans les années 1890, plus de la moitié des Parisiens étaient originaires des départements hors la Seine. Une telle croissance engendre, à elle seule, différents problèmes sociaux: manque de logements, mauvais état sanitaire, instabilité de l'emploi, etc. D'autre part, la France a conservé tout au long du XIX^e siècle une grande diversité linguistique et culturelle. Une enquête administrative effectuée sous le Second Empire montre qu'un Français sur deux maîtrisait mal ou pas la langue française. Même au tournant du siècle – c'est-à-dire bien après les lois Ferry –, il y avait des régions, à commencer par la Bretagne, où une bonne partie de la population parlaient dans leur vie quotidienne une langue régionale. Or, si Paris a sans cesse accueilli le flot d'immigrés, la ville n'était-elle pas devenue une société où se côtoyaient des gens d'origines différentes? Comment, dans ce cas-là, ils vivaient dans un même espace? N'y a-t-il pas eu de difficultés ou de conflits? Ces questions

n'ont guère été abordées par les historiens, alors que les recherches sur l'histoire urbaine en France ont largement progressé ces dernières décennies. Certes, un certain nombre d'études ont été faites sur des groupes d'immigrés au Paris du XIX^e siècle, leurs modes de vie et leurs activités. Cependant, ces monographies ont tendance à mettre l'accent sur les particularités de leur objet, sans aboutir à une vue globale sur le sujet.

Cet article essaie d'aborder les questions, à travers la politique et l'activité de l'Eglise catholique à l'égard de l'immigration provinciale. Le choix de l'objet s'explique par le fait que l'Eglise était au XIX^e siècle gardienne – pour ainsi dire – des langues régionales, alors que l'Etat républicain voulait répandre la langue française au détriment des «patois». Ainsi, l'Eglise nous permettrait de déceler l'existence de la diversité linguistique et culturelle dans la société parisienne. Pour cela, nous avons adopté deux points de vue: les sociétés d'originaires et leurs activités d'une part, l'attitude et la politique de l'archevêché de Paris d'autre part.

S'il y a toujours eu de l'immigration vers la capitale, la constitution de sociétés par les originaires de telle ou telle région est un phénomène qui date de la première moitié du XIX^e siècle. Le mouvement prend de l'ampleur sous la Troisième République. D'après un document datant de 1910, on comptait à Paris plus de 300 sociétés ou associations ayant pour but d'aider les provinciaux. Bien que le nombre de leurs adhérents reste inconnu, nous savons que l'essentiel de leurs activités résidait dans les secours d'ordre matériel: aide financière ou en nature, placement, visite en cas de maladie, etc. En revanche, peu d'effort semble avoir été consacré au linguistique ou au culturel. Il y va de même pour les «œuvres», appellation donnée aux organisations reconnues par l'Eglise.

Quant à l'archevêché de Paris, elle a été certes attentive aux problèmes liés à la migration provinciale, qu'elle considérait comme étant un phénomène négatif. Mais le diocèse ne semble pas avoir mené une politique sérieuse en vue d'aider l'insertion, dans la société urbaine, de migrants qui devraient posséder une culture différente.

De ces faits, deux interprétations peuvent être avancées. Soit, les migrants venant de différents départements français ne présentaient guère de caractéristiques culturelles distinctes; soit, à l'époque on n'accordait pas d'importance à leurs caractéristiques. La première interprétation laisse apparaître un autre problème: si la diversité était faible, comment expliquer le développement de sociétés d'originaires, qui a atteint son sommet au tournant du siècle? Quant à la seconde interprétation, nous ne pouvons pas la

négliger, car une étude portant sur une période plus récente la suggère: un groupe de géographes ayant étudié une cohorte de retraités des années 1970, montre que les immigrés à Paris, y compris les étrangers, parlent très peu du culturel, comme si leur origine ne posait aucun problème à leur vie parisienne. Afin de donner plus d'éclaircissement à ces questions, d'autres points de vue devraient être introduits, notamment une recherche sur le rôle des écoles pour les nouveaux arrivants. Cela reste à faire.

From Shock City to the Zoned City:
Reconsidering Urban Reforms in Twentieth- Century Chicago

by

NAKANO Kotaro

This study reconsiders the significance of the intellectual perceptions of the "city" in the history of the United States. By reviewing the public discourses of urban elites in early twentieth-century Chicago, I try to elucidate the rise and fall of "city consciousness," or the historical city identity as an indivisible organic unity. This work leads to the further exploration on another aspect of the same development, that is, the origin of the current civic image as one of ecologically divided space. Is the city a socially integrated entity or a space with many boundaries defined by class, gender, religion, race and so on? I observe a historical dynamism of the twentieth-century urban history in the intersection of these two interrelated ideas of the modern city.

More concretely, this article approaches the historical perception of the city, by examining the characteristics of urban environmentalism in the following three intellectual trends: ① tenement reforms conducted by social settlement houses, ② the Chicago Plan, a city planning movement, and ③ the Chicago School of urban sociology.

The tenement reforms led by the progressive social workers, such as Jane Addams of the Hull House, who were dedicated to improving poor people's housing, represent a new trend of environmentalism. Their positive engagement with the physical conditions of slum areas differed from the